

論 説

『Love Letter』の構造について

八尋 春海*

＜要 旨＞

本論は、岩井俊二が脚本と監督を担当した『Love Letter』の芸術的価値について、作品の技巧を分析することにより明らかにするものである。まず、この作品が影響を受けたテレビ番組、映画監督大林宣彦、作家オスカー・ワイルド、マルセル・プルーストなどについて先行研究に言及しながら、さらに新たに発見した影響関係を指摘する。次に、映画の価値を高めるものとして登場人物や舞台などの共通性がうまく機能していることを、過去へのこだわりというモチーフに焦点を絞り込んで明らかにしていく。最後に作品のプロット及びストーリーにおいて、その中に隠された仕掛けや意味について検討し、作品の主題ともなっている“Love Letter”が、実は、主人公が出したのではなく、彼女が受け取ったものであるという解釈を導く。

キーワード：岩井俊二 脚本 比較文学 構造 恋愛物語

0. はじめに

岩井俊二監督は、初めての監督作品『undo』（1994）で「ベルリン国際映画祭フォーラム部門NETPAC賞」を受賞した。2作目となる『Love Letter』（1995）も人々の期待を裏切ることなく、その美しい映像と音楽そして出演者の名演技で高い評価を受けることになった。映画という特性上、そのような側面に注目が集まるのは避けられないことである。しかし、この映画はむしろ脚本家として関わった岩井の力量がいかに発揮されたものであり、その技巧は注目に値するものである。本論では、映画『Love Letter』ではなく文学作品『Love Letter』という視点で作品分析をすることにする。

まず、本論に入る前に簡単にあらすじを紹介しておく。神戸に住む博子は、2年前に恋人（藤井樹）を山で亡くした。彼女は彼の彼がかつて住んでいた小樽に手紙を送る。すると死んだはずの藤井樹から返事が届くのである。後で分かったことであるが、返事を出したのは彼と同姓同名の女性であった。博子は間違っただけで女性の藤井樹¹⁾の住所に手紙を出したのである。博子の現在の恋人である秋葉（樹男のかつての山登りの仲間）が過去を忘れきれない博子に対し、事実関係をはっきりさせようと提案する。すると、手紙を受け取ったのは同姓同名の女性であったことや、樹男と樹女は中学校のクラスメイトであったことなどが判明する。博子はさらに樹男の昔のことが知りたくなって樹女に手

紙を書く。そして二人の奇妙な文通が始まり、樹女は過去を思い出しながら、樹男の中学時代のことを博子に少しづつ明らかにしていくのである。最後には、実は樹男の初恋の相手が樹女であったことを、樹女が意外なことを通して知ることになるのである。

1. 他の作品との関わり

岩井自身は、「物を創る人間にとって何かを真似たと言われるのは往々にして堪え難いことである」²⁾ と言いつつ、その一方で堂々と、彼の短編映像の『毛ぼうし』（1996）は、小津安二郎の映画を真似たものであることを認めている。³⁾ 『Love Letter』についても、岩井自身は『幸福の王子』や『チャーリング・クロス街84番地』の影響を認めている。⁴⁾ まず、彼が手紙を用いた作品にしようと考えた最初のきっかけは、彼が映画の原稿を書こうとしていた時に、中学時代にもらった手紙を10数年ぶりに取り出して読んだことをヒントにしたということである。⁵⁾ さらにそれを発展させる手がかりとなったのがテレビ番組の「探偵！ナイトスクープ」であり、そのことについて宮台真司との対談で、次のように言及している。⁶⁾

以前から、手紙を使った話をつくらうとは考えていたんです。「探偵！ナイトスクープ」というテレビ番組で見たんですが、知らない人から文通をしましょうという手紙が来たっていうんですよ。あなたのペンフレ

* 西南女学院大学人文学部 人文学科 助教授

ンド募集の記事を見ました。自分はそんな募集記事を出した覚えがないので、どうなっているのか調べて下さいと。それで探偵が訪ねていったら、送り主はまだ子供で、家にあった古い雑誌の巻末にあった文通コーナーを見て、そこに手紙を出したと言うんですよ。それを知って依頼者は、確かに文通コーナーに送ったことがあるかもしれないけれど、覚えていないみたいな感じで(笑)。時空を超えた文通かあ。これすごいなと思ったんですね。

確かに、彼の発言通り、このテレビ番組の内容は『Love Letter』のストーリーを思わせるものである。また、棚木玲子は映像の点で『時をかける少女』(原作：筒井康隆、監督：大林宣彦)との類似点を指摘している。⁷⁾『時をかける少女』は時空を超えた恋を描いており、映像のみならずストーリーにおいても類似点を見出すことは容易である。大林作品には、「新・尾道3部作」を典型とし、いくつも時空を超えたものがある⁸⁾。大林作品は、小樽と同じような港町である尾道にこだわっており、時空を超えなくてもほとんどの作品は過去へのノスタルジーが漂っている。こう見ると、『Love Letter』は、『時をかける少女』というよりも、大林作品全般の影響を受けていると言うこともできるであろう。

ところで、樹男が図書館で最後に借りた本はマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』である。それは映画の最後の場面にも出てくる。本のタイトルがはっきりと読めるようカメラもアップになっており、重要な意味を含んでいるように思われる。『失われた時を求めて』は、小説に一大転換をもたらした未完の大作であり、ブルーストはこれを執筆したことで「現代文学の始祖」と評価されるほどである。この本の内容は難解であるが、簡単にまとめると、主人公が紅茶に浸したプチット・マドレーヌを口に含んだことをきっかけにして過去の思い出が蘇り、そこからロマンが展開していくというものである。特に、樹女の立場から見ると、これは見ず知らずの者からの手紙をきっかけに昔を思い出すという『Love Letter』における展開と似ていると言えよう。実は、この二つに作品は細かな点においても共通性があるが、ここでは『Love Letter』には『失われた時を求めて』の影響が見られるという事実を指摘するだけに留めておく。

2. 作品中の共通項

藤井樹という同姓同名の登場人物が重要な要素となっているこの作品には、他にも共通あるいは類似する要素をいくつも見付けることができる。同名とさえいば、樹女の祖父は庭の木に「樹」という名前をつけている。他の類似点としてすぐに指摘できるのは、博子と樹女の外見である。博子と樹女は一人二役で中山美穂が演じており、当然二人の顔は全く同じである。樹男が初恋の樹女とよく似た女性をまた好きになったということである。見ている者に分かる外見上の違いは、博子が関西なまりでおとなしいのに対し、樹女は図書館職員として働き元気良く振る舞っていることくらいである。

博子と樹女の二人が住んでいる土地も似ている。彼女たちが住んでいるのは神戸と小樽であるが、いずれも情緒あふれる港町である。映画の最初の場面は、雪が降り積もった小高い丘の上であり、眼下に港が見えている。これは本当は神戸の景色なのであるが、むしろ小樽のように見える。また、秋葉は神戸のガラス工房で働いているが、小樽もガラス工房で有名である。作品中でも秋葉が小樽のガラス工房を訪ねて行くという場面がある。

樹女と樹男の間にも共通項が見られる。樹男は冬山で亡くなったが、樹女の父親は冬に肺炎で亡くなっており、彼女自身も冬に風邪をこじらせて病院にかつぎ込まれるのである。彼女は一命をとりとめたものの、この三人はいずれも冬の寒さに襲われたのである。樹男が急に転校した時、残された彼の机の上に死者を弔う花瓶が置いてあるのを見て、樹女はいきなりそれを床に投げつけて割る。この場面は、彼女の父親が亡くなった直後のことであり、樹男も近い未来において同じような運命を辿ることを暗示している場面であると言えよう。

以上の他に細かな共通項としては、かつて図書委員をしていた樹女が図書館に勤務しているということが挙げられる。もちろん登場人物についてももう少し詳しく見ていくと、さらに共通項を見出すことができる。そこで、その一部については次の章で詳しく述べていくことにする。

3. 過去にこだわる登場人物たち

この作品には過去にこだわりを持つ人物が随所に配置されている。まず博子は過去の恋人にこだわって秋葉とのつきあいに躊躇し、彼から恋人が亡くなった山に行こうと促された時、罪悪感さえも感じている。彼

女が天国の彼にラブレターを出すのも不思議ではない。博子の恋人の樹男も、実は中学時代の思い出を引きずり、初恋の相手だった樹女に瓜二つの博子を恋人にしたのである。また、樹女の祖父は、今にも壊れそうな古い家にこだわり引っ越すことに一人で反対している。実は後に、その家の庭に孫の樹女の誕生を記念して植えた木があるということを樹女は知り、祖父が反対していたわけを納得する。他方、本人も亡くなり今は小樽の国道の下になってしまった樹男の家の跡に立って、手紙を書いても空しいことを悟る博子の姿は哀れを誘う。亡くなった後に帰る家さえもなくなった樹男も映像にはないものの、哀れに思われる。

他には、樹女の母親も自分の夫を助けることができなかつたことが心の傷となっており、娘が同じく風邪で倒れた時には必死で助ける最善の手だてを考えるのである。さらに、少ししか出なかつたが、樹男が山で遭難した時の仲間の一であった梶親父は、樹男の死が忘れられず、山小屋に住んで今でも登山者の安全のために尽力している。また同じく、少ししか出なかつたが、樹女と樹男の中学時代の担任だった浜口も、昔のことをよく記憶しており、全部の生徒の名前を即座に番号順に言うのである。亡くなった樹男の出席番号は、彼の死がショックであったため鮮明に記憶に残っており、考える間もなく答えている。

では、一見過去にはこだわっていないように見える秋葉と樹女はどうであろうか。秋葉は亡くなった樹男のことを早く博子に忘れてもらいたいと奮闘している。彼にとって過去の記憶は恋の邪魔なのである。しかし、彼がいつも口ずさんでいる歌は、実は樹男が死ぬ間際に歌っていたものであることが後に判明する。また、樹男の死後、好きだった山登りも止めている。彼は見かけ以上に過去に縛られていたのである。

何の仕事もせずぼんやりしている博子と対照的に、顔は瓜二つでありながら、風邪にも負けずきばきと仕事をしている樹女は、昔のことにこだわるようなタイプの人ではない。まず彼女は、樹男と名前が同じでよく間違えられたりそのことでいじめられたりした苦い経験を持っていながら、すっかりそのことを忘れて、合点のいかない内容の手紙が続けて来ても、宛先間違いだと思ひもしない。彼女の様子からは過去との接点は見えない。ただ逆に、過去を新鮮にかつ遊ぶように蘇らせることのできるの、すっかり昔のことを忘れていた彼女のような人物ではなかろうか。彼女こそが、博子にまるで今日撃しているかのように思い出を語ることができる最適の人物なのである。そして次の

章で明らかにするように、過去の思い出に対する樹女と博子との対照的な性格が、この物語を展開させていく重要な要素となっているのである。

4. プロット及びストーリー

『Love Letter』には実に多くの「かなわぬ恋」が存在している。亡くなった恋人の樹男を思い続ける博子、そのような過去の恋から抜け出せない彼女に恋する秋葉、秋葉に恋するガラス工場の従業員、樹女に恋する郵便局員、樹男に恋する及川、樹女に恋していたのに言い出せないまま転校してしまった樹男などがある。基本的には、博子を中心として博子-樹男の恋が主筋、博子-秋葉の恋が脇筋であると考えるのが一般的であろう。ガラス工場の従業員、郵便局員、及川の片思いは主筋にも脇筋にも影響を与えることはなく、作品全体にかなわぬ恋物語を散りばめてさまざまな色づけで全体の雰囲気づくりに貢献しているのである。

ここで疑問として、樹女の恋がないことが挙げられる。郵便局員や樹男から思われることはあっても、主要な登場人物である彼女自身の恋は彼女の言葉からは見えて来ない。この作品中での彼女の役割は特異である。過去とも恋愛とも隔離されて、ただ今の時を何も考えずに過ごしており、他の登場人物とはかけ離れた存在なのである。この作品の表面上の物語は、秋葉のことを好きでありながら樹男への思いがなかなか断ち切れない博子を中心に、その彼女を自分の方に向けたい秋葉との微妙な関係が、樹女との文通を通して知らされる樹男の未知の素顔に揺れ動いて行くというものである。しかし実は、作品中で特異な存在である樹女が変化する、もっと具体的に言えば、博子と入れ替わるというのが、この作品の中の隠れた物語なのである。そう仮定すると、樹女-樹男の恋物語も視野に入れなければならない。これから明らかにするように、この一見、突飛な関係こそが、主筋であると解釈することも可能なのである。

樹女の立場から作品全体を見ると、日々の生活のことだけを考え世俗的な生き方をしていた彼女が、ある日突然届いた博子からの手紙により忘れ去っていた過去を思い出していくうちに、彼女自身が変化していくというものである。

そこで、この樹女の周囲で起きる出来事を物語の主筋と仮定し、そこに焦点を当てて作品を再検証していくことにする。まず最初に、樹女に素性が不明の博子から手紙が届き、手紙のみを通してやりとりが二人の

間で行われる。それからしばらく経って、この二人に一瞬の出会いが訪れる。樹女が小樽の町中を自転車で走っていると、たまたまそこに来ていた博子が気付き無意識的に「藤井さん」と声をかけるのである。博子はこの時点ではまだ写真も見えていないのに、樹女が自分に似ていることを直感していたのであろう。樹女は、一瞬立ち止まっただけで走り去るが、この直前に彼女は、博子に樹男の存在を知らせる手紙を出していたのである。この時を起点として、この二人の間で奇妙な文通が始まり、同時に二人の入れ替わりが開始されることになるのである。

小樽から神戸に帰った博子は、樹男の中学校時代のことを知っている樹女に「あなたの思い出を分けて下さい」と頼む。そして過去の思い出を記憶の隅に追いやっていた樹女は、博子に言われるままに過去を思い出していくのである。

ある時樹女は、博子に頼まれ昔樹男が走ったグラウンドの写真を撮ると、何かにひかれるように中学校の校舎に入って行く。すると偶然、かつての担任の浜口と出会ってそのまま図書館に連れて行かれる。そしてそこで樹女は、後輩の図書委員の女子中学生たちから「藤井樹探しゲーム」というのをしていることを聞かされることになる。

実は、樹女が中学生の頃、樹男とコンビで図書委員に任命されるが、樹男は委員の仕事せず、誰も借りていない本を借りて（つまり誰の名前も記入されていない）図書カードに「藤井樹」と書くことを楽しみとしていたのである。現在の中学生たちはその「藤井樹」という名前が図書カードに書いてある本を探す競争をしていたのである。自分たちの目の前にその同じ名前の樹女が目の前に現れたので、中学生たちは驚く。しかし樹女は、それを書いたのは他人だと言ったため、中学生たちはよほど樹女のことを好きな男子生徒が書いたのだと断言する。⁹

この時、樹女は浜口から樹男が既に死亡していることを聞かされる。そして、これ以降、彼女は樹男のことを思い出す時には、樹男が転校する直前に亡くなった自分の父親のことも同時に思い出すのである。そのため、彼の印象も、彼女の心の中でこれまでになく一層強いものとなっていく。

中学生たちは後日、樹男が最後に借りた『失われた時を求めて』を持って樹女を訪ねて来る。この図書カードの裏に樹女の似顔絵が丁寧に描かれていたことを知らせに来たのである。この時女子学生が立っている場所は、偶然にも樹女がまさに樹男の最後の姿を見送っ

た場所である。樹男は樹女との別れに際して、この本の返却を依頼していたのである。樹男は、図書カードに描いた似顔絵が樹女の目に触れることを期待して彼女に直接依頼をしたのかもしれない。図書カードに「藤井樹」と書く樹男の行為は、博子の行為と通じるものがある。ただ好きな相手の名前を書くという行為であり、まさに博子が届くはずのない天国への手紙を書いた行為と同じなのである。どちらもラブレターなのである。

それでは、映画のタイトルにもなっているLove Letter（ラブレター）は一体、誰から誰へのラブレターであろうか。博子が亡き樹男にあてた届くはずのない手紙を指すというのが一般的な解釈であろう。しかし、樹男が樹女のために書いた図書カードは、時間を超えて樹女の元に届いたラブレターではなかろうか。樹男は、かつてクラスメイトの男子生徒が樹女をからかっていた時に、いきなり近付いて蹴ったことがある。恥ずかしがり素直に自分の気持ちを伝えることができなかっただけで、本当は彼女のことを好きだったのであろう。

岩井自身が言うように、この作品が「探偵！ナイトスクープ」をヒントにしたとすれば、まさに昔書いたものが現在蘇ってきた図書カードは、天国への手紙よりも主題を的確に包含しているのではなかろうか。

樹女に博子から最後の手紙が届く。博子は樹女に、「これはあなたの思い出ですから」と言って、それまでの全ての手紙を返してきたのである。樹女としては、思い出を分けてあげるつもりだったが、逆に彼に対する思いを受け取ったということになる。心の隅から引っぱり出して来た樹男の思い出は、博子からまた樹女へと戻ってきたのである。樹男に関する思い出は包み隠さず博子に伝えてきた樹女も、最後の『失われた時を求めて』の図書カードのことだけは意図的に伝えない。結局は、樹男は博子の心から樹女の心に移って行くのである。まさに『失われた時を求めて』のストーリーと同じく、樹女は『失われた時を求めて』という本をきっかけに、樹男に対する過去の思い出を、これからさらに蘇らせるのであろう。樹男への思いを吹っ切り秋葉との恋に躊躇がなくなった博子に対し、樹女は逆にだんだんと樹男に引きずり込まれて行く。樹男の居場所はおもはや博子の心の中ではなく、樹女の心の中なのである。

- 1) 以下、男性の藤井樹を「樹男」、女性の方を「樹女」と表記する。
- 2) 岩井俊二『トラッシュバスケット・シアター』角川書店2000年、p.176
- 3) 同上
- 4) 岩井俊二『Now and Then』角川書店1998年、pp.69-71
- 5) 『トラッシュバスケット・シアター』、p.129
- 6) 岩井俊二「映像のプロフェッショナルリズム 対談 岩井俊二、宮台真司」『フィルムメーカーズ 岩井俊二』キネマ旬報社2001年、p.25
- 7) 榎木玲子「風邪をひいた現在の治し方」『フィルムメーカーズ 岩井俊二』、p.131
- 8) 「新・尾道3部作」とは、『ふたり』、『あした』、『あの、夏の日』のことである。参考までに「尾道3部作」は、『転校生』、『時をかける少女』、『さびしんぼう』のことである。大林監督作品の『異人たちとの夏』や『タイム・リープ』も時を超えた物語である
- 9) 後に博子も樹女への最後の手紙の追伸で、図書カードの名前のことについて、樹男が書いたのは、樹女の名前だったのではないかと指摘している。

Love Letter and its Structure

Harumi Yahiro

<Abstract>

The purpose of this paper is to show the artistic techniques of the movie Love Letter. First I will show the influence of a TV program, the director Oobayashi Nobuhiko and the famous writers Oscar Wild and Marcel Proust on Love Letter. Then I will point out the similarities of the characters and scenes which give the audience the profound impressions. Finally I will demonstrate the meanings of “love letter” in this work; that in fact the letter is not from the heroine but rather to herself through analyzing the story.

Key Words: Iwai Syunji, Script, Comparative Literature, Structure, Love Story